

## 戦争と歴史家

上田 信

『史苑』の本号は「東洋史特集」として、相次いで鬼籍に入られた戴國煇先生と石橋秀雄先生を偲び、それぞれの学恩を受けた方を中心に執筆していただいた。私事にわたることであるが、石橋先生の後任として戴先生の引きで私は立教の教壇に立つこととなった。両先生との縁は浅からず、亡くなられたとの連絡を受けたときには生前にお話ししていた様々な事柄が思い出された。繊細緻密な石橋先生そして豪放磊落な戴先生と対照的なお人柄であったが、それぞれ歴史研究者として軸がぶれることのない点で共通していたように思われる。

昨年末はまた、私が研究者への第一歩を踏み出すときに指導していただいた田中正俊先生が、そして面識はないものの教科書裁判を通じて敬意の念を抱いていた家永三郎氏が亡くなられた。研究と人生とのあいだに一本の筋が通っていた歴史研究者を相次いで失ったことになる。この日本で歴史を学ぶものとして、事柄の位置関係を計る座標をなくしたような不安を、最近、ひしひしと感じる。歴史的な危機を乗り越えてきた世代の発言が、状況の変化に流されずに将来を見据える指針を与えてくれた。そうした発言がなく

戦争と歴史家（上田）

なることへの不安といったらよいであろうか。

私の父と祖父は、いずれも銀行員であった。父は四十歳代のときに支店長として働いていたときに戦時に患った結核を再発し、長期にわたって入院を余儀なくされたため、出世の道から外れた。その父が前世紀の八〇年代後半、日本がバブル経済に入ろうとしていた時期に、当時の銀行のありかたに強い危機感を募らせていた。しかし、行内での発言力がないために、深い苦渋に満ちた表情を顔に刻んでいたことが多かった。父は祖父から昭和恐慌時の銀行について、話を聞かされていたようである。そのときの銀行が直面した危機、それに起因する戦争へと転がり込んで行くプロセスを知るものが銀行関係者に残っていたら、バブル経済を煽るようなことに歯止めをかけたに違いない、そんな愚痴を父から聞かされたことがある。日本がバブル経済に突入したとき、昭和の恐慌を身を以て経験した銀行家は、ほとんどすべて亡くなるか、高齢のため社会的な役割を果たすことはなかったからである。

世代の交代は、三十年とされることが多い。社会の第一線で活躍していたものが引退し、次の子の世代に譲るまでに、おおよそ三十年の時間が経過するという。しかし、引退し隠居したとしても、重大な危機に至るプロセスが進行すれば、身を引いたものも発言する。これが社会の暴走に対する一つの歯止めとして機能するのではないだろうか。ときに老いの一徹などと揶揄されることがあったとしても、青年期の歴史的危機体験に裏打ちされた発言がなされたときには、抗しがたい力があるものである。バブル以前の銀行にはそのような先輩がいて、バブル経済の誘惑に銀行のトップが取り付かれようとしたときには、毅然と意見したのだという。そうした世代が社会から消えたとき、暴走は自壊するまで止まらなくなる。こう

したサイクルがもし歴史の上で確証されたとしたら、絶対的な世代交代と見ることができよう。それは一つの歴史的危機から起算して、おおよそ六十年ということになる。

近年、歴史家の訃報に接するたびに、歴史学界もいま絶対的な世代交代の時期に差し掛かっているのではないかという暗雲が、脳裏にわき上がってくる。一九三一年に始まり、三七年に本格化する日本の侵略戦争を経験した世代の発言の重みを、いまあらためて感じている。石橋先生には残念なことに、歴史を学び始めた原点について、お話を伺う機会を持たなかった。他方、十年ほど史学科のなかで親しく接していただいた戴先生からは、ことあるごとに様々な想いを聞くことができたことは、私にとって貴重な経験であったということができよう。

もつとも鮮烈な印象を与えられた話がある。誤りがあるかも知れないが、私の記憶に従って記しておこう。一九三一年に台湾で生まれた戴先生は、少年時代に体格・学業とも優れていた。太平洋戦争が激しさを増していたとき、担任の教員が戴少年を新聞社の特別奨学金の特待生に推薦した。戴少年は父親には相談することなく、日本内地の中学に進み、戦車兵にあこがれていたため、軍人になる進路を考えていた。ところがうつかりと自宅に置いておいた内定の通知を父親に見つかってしまふ。顔を真っ赤にして大声を張り上げる父親に戴少年は殴り飛ばされ、奨学金を得るという件も辞退させられた。これは戴先生にとって人生の最大の岐路の一つであったことは、間違いない。

本誌の研究業績にも挙げられている「中国人にとっての中原と辺境…自分史(台湾・客家・華僑)」と関連づけて「橋本萬太郎編『漢民族と中国社会』山川出版社、一九八六年)は、中国人とはなにかという

## 戦争と歴史家（上田）

問いに対して、自らの経験を語ることで内面から見据え、また歴史家として自らを外面から位置づけようとした論考である。これを読むと、日本統治下の台湾において、村落の名士として家を構えていた父親が、実際にたたかに中国人としてのアイデンティティを保持し続けていることがわかる。台湾で皇民化運動が展開されたとき、各家庭に神社の大麻（神札）が押しつけられたとき、父親は「昼間は警察の巡視を警戒して、「大麻を入れた」神棚を「本来は祖先祭祀に用いられる」神卓に一応はならべたが、夕方になると、神棚ごと引き出しの隅に入れて知らぬ顔の半兵衛を決めこんでいた」という。こうした父親からときに強烈なビンタを食らいながら、戴少年は自我を確立していったのである。

もし奨学金を得て日本に行っていたとしたら、どうなっていたのか。一九五五年に留学生として赴いた日本で、優秀であった台湾出身者が裏社会の顔となっていたことが少なくないことを知ったという。植民地統治期の価値体系に見事に適応できたものは、戦争が終わって価値が転倒したときに、梯子を外され行き場を失ってしまう。戴先生は顔役たちにもう一人の自分を見出すとともに、自らのアイデンティティを保つことの重要性を認識するようになったのではないか。そして、弱者のアイデンティティを奪うことに対して、戴先生は常に敏感に異議を唱えたように思われる。多様なアイデンティティを統合していこうとする動きに対しても、強い批判の目を向けていた。普段は新聞を広げている教授会では、議事がアイデンティティの問題に触れると立ち上がり、大きな目をギロリとさせて発言する。その姿には絶対にゆずれない一線があることを、予想させるものであった。

二〇〇一年九月一日以来、近代国家の枠組みを持たないテロという特殊二一世紀的な危機に対し、ア

メリカ合衆国ブッシュ政権は、テロ支援国への戦争という二〇世紀的な対応を採ろうとしている。新しいタイプの危機には、過去の経験はほとんど役に立たない。過去の悲劇を繰り返さないと、パターン化された行動では、とても対処できないであろう。どうしてもゆずれない一線、あるいはさまざまな事象の位置関係を計る座標軸の原点とでもたとえられるものを自覚し、そこから臨機応変に行動を繰り出していくことが求められる。六十年前の歴史的危機を乗り越えた歴史家たちの言葉を、心の中で呼び起こしながら、私たちは進んで行くことが求められているのかも知れない。

(立教大学文学部教授)